FFGビジネスコンサルティングの

ちょっと釣り道

［鮭神社を知ってるかい サケ編］

Vol.15

①本殿の中を見たくてたまらない筆者　②鮭神社の立派な鳥居　③本殿の中の奉物　④サケを釣りたいと拝み倒す筆者

すべての※サーモン・トラウトアングラーに捧ぐ……。

※サケやマスを釣るのが好きな趣味人

初秋の夕暮れの控えめでやさしい光が、境内の木々を揺らし拝殿に影を落とす。

遠賀の川面揺蕩う筑豊の、田園と丘陵が広がる嘉麻の国道で、ふと「鮭神社」という標識が目に入る。「は!? 鮭神社? 鮭ってこの辺おらんやろ!?」。

鮭神社の標識

サケ科の魚に憧憬を抱く釣り人は多く、小欄で先にご紹介したニジマスやヤマメもサケ科で美しい姿態を纏う。その外見とは裏腹に、繊細で神経質な反面、魚食性で獰猛、海や湖に降りさらに大型化する種も多く、2mにもなるイトウもいれば、山形県の大鳥池のタキタロウなど大魚伝説も残されている。九州の釣人からすると身近ではなく心躍る憧れの対象魚達なのだ。筆者も同類で気が付けばその境内に立っていた。

国道から入る小径の先にその古社はひっそりと佇む。そもそも鮭などいるのかなという気持と、上流のヤマメが降海し銀化したサクラマスと混同したのかな、とも思えなんとも不思議な気持になる。流域約67万人を潤す豊かな遠賀川の上流から源流部は、流程短く流れは細く、古来から降海型のヤマメが数多く生息していたとは思えないが、ググってみて驚いた。実はこの川、鮭の遡上する国内最南端らしい。

この山里の小さな神社の歴史は古く建立は769年の奈良時代。そんな昔は遠賀川の水辺の風景も、今とは全く違っていたかもしれない。一生をかけた旅で生まれ故郷の川に帰って来て産卵する鮭の生態はよく知られ、浪漫を感じる

サケやマスは釣れないとわかっていても竿を出しちゃう筆者

し、ここには歴史もあった。実は鮭を祀る神社は全国的にも珍しいというが、この地の先人達は、イニシエから畏敬の念を抱いて信仰の対象としていたのかもしれない。

それでも九州は筑豊の地に、鮭を祀った神社が在ることに、筆者はオーパーツ的なミステリアスを感じてしまう。

「遠賀川」。その下流域は全国的にもバスフィッシングのメッカとなり、鮭とバスとで死闘を繰り広げているかもしれない。そしてこの故郷の川に鮭を呼び戻そうというプロジェクトが、具体的に立ち上がり始まっていると聞く。そんな世相をよそに、この山里の古い森の社は、この地で静かに歴史と神秘の時を刻み続ける。……たぶんね(笑)

遠賀川源流の地にて風景と同化しちゃう筆者